
僕らは、ただ強くありたかった。

蛍光灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らは、ただ強くありたかった。

【Nコード】

N0883Z

【作者名】

蛍光灯

【あらすじ】

少年は、魔法高校の学生だったが、親友のせいで世界を変える手伝いをするようになってしまう。

プロローグ（前書き）

この小説は、フィクションです。
実在の人物団体は、存在しません

プロローグ

説明

この世界では、魔法が存在し、国同士が、戦争をしていた。魔法を使える者の中には、潜在的に、

強い魔力を持ち英雄の力と記憶を持つ転生者がいた。転生者は、記憶を持っていてだけで、性格まで同じではなかった。そして、生まれつき不思議な髪や目をしていた。国は、転生者を守るため護衛を一人一人につけ守らせ国を裏切らないように見張っていた。そして、転生者は、親族以外に、何の英雄の転生か、

喋っては、いけなかった。この禁を破ると力を封印され、一生国に監視されることになる。封印は、五年後に、解除される。

どうしてこうなってしまったのだろうか。

僕は、ただ強くなりたかったただけなのに、こんな事になるなら、あの時あの場所で、もっと僕の心が強く

あれば良かったのかもしれない。そうあの時あの場所で別の道を選
択し彼といれば……

夕暮れ時二人の少年が小さな広場のような所で話していた。歳は、9歳くらいで、一人の少年は、

髪の色は、綺麗な銀色で、目も同じ色で、絶世の美少年のような顔つきで、やさしそうだった。

もう一人は、髪の色は綺麗な灰色で目も同じ色顔は、まあ美少年に入る部類で、嬉しそうに笑っていた。

銀色の少年が、急に真剣な顔になり「龍騎^{りゅうき}、俺は、戦争をするこの

世界が嫌いだ、このままだと俺も、俺の家族も、お前や、お前の両親も死んじまうでも、俺には、それを変える力も守る力も無いだから俺軍に入るよ」

もう一人の少年は、驚いた顔で「で、でも、迅^{じん}、君だって転生者なんだから力は、あるじゃないか君は、もう充分に強いよ」

迅は、「違うよ龍騎俺だって、まだまだ弱いし守る力は、ないんだ・・・」消え入りそうな声だった

龍騎は、しばらく何もいえなかった、親友の決意がこれほどとはと驚いていた。

迅は、しばらくして背を向け歩いていった

龍騎は、決意したように笑いながら迅に言った「じゃあ、ぼくが、君を守ってあげるよ」

迅は、振り向いて笑顔で「それは、俺を倒してから言えよ」

龍騎は、「今は、無理だよ。だって君に、名前言っちゃったから」

迅は、気まずそうな顔になって「世界が、変わったら教えるよ」と言った

龍騎は、「うん、分かったバイバイ」と笑顔で言った

迅は、「おう、俺が世界を変える本当の英雄になってやるよ」と言った

二人は、この日を境に別々の道があるきだしたそれが、交わる時争うとも知らずに・・・

ブログ（後書き）

連載は、不定期です。改善点など感想がありましたらください。
否定的なコメントとかやめてください。

第1章日常

目が覚めて起きると見慣れた自分の部屋いつ見ても無駄に広いこれは、両親と不仲な俺の為に姉さんが買ってくれた

マンションの一室だ、一人用のワンルームでいいと言ったのにまったく・・・俺の名前は、ひすきりゆうき火月龍騎

魔法高校射撃科の二年生だ、「今日もめんどいなー」といいながらも準備する。性格は、自分でも困っているめんどくさい

と思っけていても、困っている奴は、ほっとけないだから、周りからは、男女ともなく慕われてると思う。でも告白とかは、

されたためしがない、結局良い人止まりなのだろう・・・髪は、長髪で顔を隠している。色は、変わらず灰色だ

顔は、一般的に見て上の下くらいだろうか、俺は、あまり気にしていないが子どもの頃から変わったのは、体格と、

戦闘の技術と腕に残る刺青のような封印の痕ぐらいだろうか封印の痕は、見られてもうれしいものでもないので腕には、

包帯でぐるぐる巻きにしてある遅刻しそうになつたので急いで学校に向かった校門近くまで行くと、友人の黒川比例くろかわひれいと青沢雄二あおさわゆうじが口喧

嘩をしていた。黒川は、髪と目は、紫で顔は、インテリ系眼鏡のイケメンだ、青沢は、髪と目は、青色で男らしい顔のイケメンだ二

人とも俺と同じ転生者だ、しかも家は、大富豪とくれば

成績もいい黒川は、射撃科の第一位青沢も剣術科の第一位だ今学校の女子の人気を二つに分け独占しているどんな完璧超人だこいつら俺に分けるよ・・・おおいかんいかん僻みになってしまった俺の成績は、第七位だったりする實力は、

黒川と同じくらいだが、いかんせん筆記がダメダメなのです。つまりは、馬鹿なのだろうとりあえず俺は、二人の

喧嘩を止めに入った「まったく論理的じゃないね」「はあ、論理も糞もあるかよバーカ」分かるだろう最初のが、黒川で、

次の青沢だ以下くとあでいこう「何の話でもめてんだ」あ「肉まんをそのまま食べるかちぎって食うかの話だ」

俺は、はっきり言って驚いた。こいつら頭良いのに馬鹿なのだろうか？「どっちでも良いだろうまけりゃ」と俺が言くと

く「良くないんだよ龍お前どっち派だ」めんどいなこいつら俺は、普通に食う派だが、そんなこと言ったら黒がいじけるし

青が調子に乗ってうざくなるから俺は、こいつらの喧嘩をほっとく事にした。喧嘩したきゃしてるモテンだから苦しめ

リア充め、おつといかんまた僻んでしまった反省反省「おれは、一口で食う派だ」青と黒は、驚いていた。は、ザマアミヤガレすると黒が、「さすがだな龍あんな大きなものを一口で食うとは、言葉も出ない」青が、「すげーぜ龍」とか

言い始めやがった。いやお前らまず疑えよ信じんなよ、やっぱこいつら馬鹿なんじゃないだろうか・・・

こいつらの頭が心配になってきたぞすると黒が、ニヤニヤしながら、肉まんをだしてきた

「さあ龍食えまさかさっきの嘘じゃないよな」青もニヤニヤしてやがるこいつらはめやがったな

やっぱ頭良かったぜ・・・俺は、顔を引きつらせて「あ、ああ嘘なわけねーだろみせてやんよ」とか言ってしまった。

俺の馬鹿意地張らないであやまればよかったぜ、くそ食うしかないのか・・・やってやんぜ男龍騎二言は、無しだぜ

俺が、決意を固めたとき黒の姉このはの木のの葉さんが、「あー肉まんだー」と言いながらかつさらっていった

ふーラッキー木の葉さんマジ神だぜーと思いながらも俺のあの決意は、なんだったのかと肩をすくめると

何を勘違いしやがったのか黒が、「そんなに食いたかったのか肉まん？」とか言い青が自信満々に「安心しろこんな事

もあるつかと超特大肉まんを用意しといたぜ」とか言いながら普通の三倍くらいの肉まんをだしてきやがった

こいつとんだだけ用意周到なんだよ俺を殺したいのかこいつは、あんなに一口で食うとかの前に窒息して死ぬから

やっぱバカなのこいつ、イライラしたので肉まんにグーパンチごめん肉まん恨むならこいつを恨んでくれ

丁度チャイムが鳴ったので教室に急いだ青と黒は、悔しそうにしてたが諦めたようで教室に入っていた

青は、剣術科なのでクラスが違う。クラスが騒がしかったのでとなりの女子に聞いたところ剣術科に転校生が来たらしい

かなりの美少年だとか俺は、心の中で、ち、リア充かよと僻んだこれ以上俺は、考えると何か大事なものを失う気がしたので考えるのを辞めた……

昼休み黒と一緒に青を探しに行くと青が見知らぬ少年をつれて歩いてきた

そいつは、俺の良く知る人物で軍に入った親友神谷迅かみたにじんだった

「久しぶり龍」と笑顔で言った……

第1章 日常（後書き）

文法苦手なのでよろしくお願いします。

日常？（前書き）

文法下手でごめんなさい。

日常？

「龍久しぶり」

なぜだ、なんで迅がこんなところにいる、あいつは、軍に居る筈だ退役したとか

聞いてないぞどういう事だ。驚いた顔をしている俺に青と黒は、「あれ、龍知り合いなの？」とか聞いてきた

何も答えられない俺を尻目に迅が軍人な事を隠しながら説明している。俺は、まだ放心状態だ

いや、人間ほんとに驚くと何も出来ないんだな、いやー勉強になつたと暢気に考えている俺は、やはり馬鹿なのだろう

迅が話終わったようだ、俺もさすがに立ち直った俺は、青と黒に「ごめんちよつと迅と二人で話したいから」と言い

青と黒を尻目に迅を連れて屋上に走り去った。青達は、不満そうだったが、しょうがないだろう。

後でなにかおごれば機嫌も直すだろう現金な奴らだまったく・・・

さっそく迅の馬鹿や郎に聞いたこいつに何か聞くのは、何かやだがしょうがないだろう

「なんでお前がここにいるんだよ、軍に入ったんじゃないのか？」すると迅は、笑いながら「はは、驚いたか？」

とか言ってきた理由聞いてんのに質問で返すな馬鹿やろう殺したるかマジで

「ごめんごめん、そんな怒るな龍。ちゃんと話すから、じつわな元帥が、君もたまには、何か楽しんだらどうだい？」

そうだ高校にいったらどうだい？とか言われてなこうなったんだよ。嘘じゃないぜ」

「はあ、嘘言つてんじゃないぞ？元帥に会えるわけじゃないじゃん、た

しかお前大佐じゃなかったか大佐で元帥にあえねーだろ」すると迅は、笑って「あいかわらず馬鹿だなお前俺の今の階級は、少将だ、最年少だぜ」とか言いやがった

俺は、絶句した少将なんてのは、そんな簡単になれるものじゃない將軍職なのだから当たり前だ

俺は、素直に「すげーな迅お前マジすげーよ」と言ってやった、迅は、真剣な顔で突然

「お前の噂全部調べたけどこの学校では、猫被ってるみたいだな四年前の戦争で、最強を意のままにした

伝説の傭兵のくせになぜ軍に入らないまだ小父さんたちと喧嘩してるのか？いいかげんにしろよ軍の名門の

火月家の次期当主のくせに」となぜか怒っていた。俺が、傭兵として戦ったのは、こいつを

守るために強くなりたかったからだというのにあの約束の為に・・・

「お前には、関係ない」と弱弱しく言うことしかできなかった迅は、関係なくない俺は、お前と一緒に

戦いたいのなお前は、一番得意な刀を学校で使わない射撃科の七位で甘んじてるじゃないかまだ刀を使っていたら

俺も許せるでも、お前は、本気をだそうとしないそれが、気に食わないんだ」と激昂げきいつした。

俺は、何も言えなかった。たしかにこいつの言う通りだったすると迅が突然

「俺の計画にしばらく協力しろ今からお前は、俺の部下で大佐で副官だ文句は、受け付けない」

なんと俺は、急に大佐になったようだしうがないこいつを少し手伝ってやるか俺は、「いいぜやってやるよ

何を手伝えばいい？」と答えた迅は、とたんに笑顔になった俺は、知らなかったここから先今までの日常が

手に入らなくなってしまうとは、……………

今思えば、引き返す最後のチャンスだったのかもしれないここでの選択が最後にあんな結果を

招いたのだろうか今でも分からないただ力の無かった俺や強さの意味を間違えた迅が、間違えた結果だったのだろうか？

日常？（後書き）

楽しんでもらえたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0883z/>

僕らは、ただ強くありたかった。

2011年12月5日19時57分発行